

主 題：つぶやくのは止めなさい**聖書箇所：ピリピ人への手紙 2章14－16節**

私たちはこれまで「新しく生まれ変わった者たち」は新しい生き方をする者だと見て来ました。神の恵みによって罪赦されて新しく生まれ変わった私たちは、まず、神を愛する者になるとみことばは私たちに教えてくれました。神の敵であり神に敵対していた私たちが神を愛する者へと生まれ変わったのです。同時に、私たちは神を信頼する者として歩むようになりました。また同時に、神を恐れる者として歩み始めました。そして、四つ目を前回見ました。「従順に歩む者になった」ということを見て来ました。新しく生まれ変わった者たち、罪の赦しを頂いた者たちは、主に対して従順に生きる者へと生まれ変わったのです。

ピリピ2：12には「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」とあります。パウロはもう救いに与ったクリスチャンであるあなたに対して、益々従順であるようにと勧めます。そして、彼は、主に対して従順に、すなわち、神のみことばである聖書の教えにしっかりと従って救いを達成してくださいと言いました。この「救いを達成する」というのは、罪からの救いのことではなく、霊的に信仰において成長するということです。そのことをパウロが教えていると前回見ました。しかも感謝なことに、私たちが主に従い続けていくために、そこには神の完全な助けがあるとパウロは教えてくれました。ということは、我々が自分の罪深さ、弱さを神の前に説明しなくても、もうすでに、神はあなたの弱さも罪深さもご存じだということです。

ですから、**神の約束は、**

(1)「**意志**」に働かれている：「あなたがたのうちに働いて」（13節）、神はあなたがたの意志に働いて「志を立てさせ」てくれる、つまり、こういう願いを持ってこのように生きていきたいという思いをくださるのです。

(2)「**行動**」に働かれている：それだけでなく、行動にまで働かれると言います。神が命じておられることを実践していくその行動にまで、神は助けを与えてくださるのです。

神はあなたが信仰においてしっかり成長していくために必要なことをすべてして下さるお方です。神に喜ばれるように生きていきたいという願いをくださり、それを実践させてくださる。その目的は、私たちが霊的に成長するためです。私たちがキリストに似た者へとなるためです。そのように神は働かれるとパウロは教えてくれたのです。

今日はその続きの14節からを見ていきますが、パウロはここでクリスチャンたちに命令を与えています。14節「**すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。**」、「**行ないなさい**」と動詞の現在形を使っています。しかも、これは命令形です。どちらでも良いのではなく、このようにあなたは行なっていくのだ、行ない続けていくのだということを命令するのです。ですから、継続的な歩みのことです。確かに、神があなたを罪から救ってください、救いを与えてくださいました。そして、神ご自身があなたの信仰を成長させてくれます。パウロが言うように「**私が植えて、**」、つまり、パウロが福音の種を蒔いて、そして、「**アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。**」（1コリント3：6）と。

ですから、私たちの信仰は確かに神が成長させてくださるのですが、それは私たちに何の責任もないということではありません。私たちは信仰者としてしっかりとその責任を果たしていかなければいけないのです。ですから、パウロは「**自分の救いを達成してください。**」と言ったのです。罪からの救いも、そして、信仰生活の歩みも神の助けがあつて神が為して下さるのですが、それは私たちに何も責任がないということではなくて、実は、私たちにもしなければならぬ大切な務めがあるということです。

☆「従順」に関する説明 14－16節**A. 「従順」に関する二つの注意事項 14節**

パウロは「従順」に関してこのような説明を加えています。二つの注意事項がここに記されています。「**すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。**」と。神のおことばに従順に従っていくが、そこで気を付けることがある。それは「**つぶやかないこと**」と「**疑わないこと**」だと言います。ここで「**すべてのことを**」と言っています。つまり、神の命令において、この命令には従うけれどこの命令には従わないというような例外を設けてはならないということです。すべての命令に対する私たちの態度が問われているのです。

1. つぶやかないで

「不平、不満を言わない」という意味です。このギリシャ語は新約聖書の中に4回出て来ますが、2回は「つぶやく」と訳されています。この箇所ともう一箇所は1ペテロ4：9「**つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。**」です。後の2箇所は、日本語では「ひそひそ話しをする、苦情を申し立てる」と訳されています。神の命令を聞いた時に苦情を申し立てるといようなことがあってはならない、神の命令を素直に聞いて素直に受け入れなさいと言っているのです。

2. 疑わないで

このことばもおもしろいことばです。日本語ではこのように訳されていますが「考え、意見、議論」を意味することばです。実は、このギリシャ語から英語の「ダイアログ (dialogue)」ということばが派生しています。日本語でもダイアログとは「対話」を意味することばですが、その元になっていることばがこの「疑う」というギリシャ語なのです。意見を交換したり話し合ったりするという意味です。ですから、神とそのようなことをしてはいけないと言うのです。皆さん、私たち人間が神といったいどのような意見交換をするのでしょうか？神のおっしゃっていることに異議を申し立てたり、論争したり議論したりするなどというのはおかしいです。相手は神です。絶対者なる神です。その方に対して、「神さま、それは少しおかしいのではないですか？神さまって本当にそのように言われたのですか？神さまはそうに言っているけれど、今やらなくても良いでしょう…、また後でやれば良いでしょう。神さまは確かにそう言われるけれど、その通りにやらなくても良いのでしょうか？」と、まさにこのような対応がここで禁止されているのです。神が言われたことに対して、私たちに必要なことは、それを素直に受け入れて素直に従っていくという態度です。そのことをパウロが言うのです。

不平不満を言ったり、神が言われていることに対して議論するようなことは、決してしてはならないという命令がこの14節に記されているのです。しかし、残念ながら現実には、私たちは神に不平不満を申し立てていませんか？神が言われたことをそのまま信じようとしない、そのようなことを人類は繰り返して来ました。イスラエルの人たちを見ると、そのことが何度も示されています。

例：出エジプト16章：イスラエルの人たちがエジプトを出た後、「パンを食べたい」と言った時に神は彼らにマナを与えました。「マナ」とは「これは何だ？」という意味です。モーセは「各自が自分の食べる分だけ、その日その日に集めなさい。それを朝まで残しておいてはいけません。」と言いました。人間は欲張りだから、たくさん集めておいて明日は集めに行かなくてもいいようにしましようなどとしてしました。ところが、翌日まで残しておいたマナは虫がわいて悪臭を放ったとあります。彼らはモーセが「その日の分をその日のうちにしっかり食べなさい。朝まで残しておいてはいけません。」と言ったにもかかわらず、それを守ろうとしなかったのです。そこでモーセは彼らに対して怒ったとあります。

16：20「**彼らはモーセの言うことを聞かず、ある者は朝まで、それを残しておいた。すると、それに虫がわき、悪臭を放った。そこでモーセは彼らに向かって怒った。**」と。また、神はモーセを通してこのように命じます。「六日目には翌日は安息日だから二日分のパンを集めなさい。安息日に出て行ってもマナはありませんから。」と。人々はどうしましたか？七日目にもパンがあるのではないかと思って同じように外に出て行くのです。少し笑ってしまいますが。私たちはそこに自分自身を見ませんか？確かに、神はそうに言われた、でも、私はこう思うと…。16：28をご覧ください。「**そのとき、【主】はモーセに仰せられた。『あなたがたは、いつまでわたしの命令とおしえを守ろうとしないのか。』**」、主はとても厳しいことばを言われました。失敗はこれだけではありませんでした。

民数記14章：モーセが12人の斥候を約束の地イスラエルに送りました。40日間、彼らはイスラエルの町を巡り歩いてモーセたちのところに戻って来ました。その地の産物である果物を持って帰って来た彼らはこのように報告します。「確かに、あの土地は豊潤な土地です。こんなに作物が育っています。」とそこまでは良かったのですが、続いて、彼らはこのように告げるのです。「実は、あの町には巨人がいます。我々があそこに攻め上って行くと大変なことになります。だって彼らには私たちはいながらの見えるでしょう。絶対に負けます。止めましょう。」と。しかし、ヨシュアとカレブだけは違いました。「あの地は神が約束された地だから攻め上っていこう。」と…。ところが、人々はそれに従いませんでした。「いいえ、そんなことをしたら我々はみんな滅んでしまう。こんなことなら、あのエジプトにいればよかった。こんなことなら、荒野で死んでしまった方が良かった。もう一度エジプトに戻ろう…」などと言い始めるのです。14：2「**イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。『私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。できれば、この荒野で死んだほうがましだ。』**」と。彼らは不満を言ったのです。そして、モーセとアロンは彼らを説得して主に従うようにと語りました。すると彼らはモーセたちを殺そうとするのです。14：11「**【主】はモーセに仰せられた。『この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしがこの民の間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、い**

つまでわたしを信じないのか。」。イスラエルの民はエジプトを出てから、彼らは常に神のみわざを見て来ました。確かに、全能の神がおられる、生きた真の神がおられるということを彼らは様々なことを通して教えられ体験して来たのに、それも関わらず、神が言われることをなかなか信じなかったのです。こうして多くの人々は神に従い切ることはありませんでした。

でも皆さん、このような失敗を通して、また、私たち自身も失敗を繰り返す者ですが、このことだけは忘れてはいけません。私たちを造られた創造主なる神は、当然、私たちに対して全き服従を要求されます。この方にはそれがお出来になるのです。なぜなら、この方があなたを造ってくださったからです。造られた私たちは、当然、この方に服従するという責任を持っています。この方は神なのです。そして、私たちはその方によって造られた被造物です。ですから、私たちが覚え続けなければいけないことは、「神が私に問われていることはこの方の命令に服従することである」です。

***「主の命令に従順であれ！主のみこころに従順であれ！」、それが、時代や人種、民族を越えて、創造主なる神が被造物である人間に命じておられること**

「この方に従いなさい！この方に忠実に従っていきなさい！」と。ですから、そのために、このように不平不満を言ってみたり、神と議論してみたり、神を疑ってしまうようなことが決してあってならないと、そのことが14節で警告されています。

B. 従順のもたらす祝福 15－16節

ここには、あなたが従順に従うときにもたらされる祝福のことが記されています。神はどのような祝福を約束してくださっているのか？あなたは主に用いられ、主からすばらしい祝福を頂くと、そのことがここに記されています。「15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子どもとなり、16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」

1. 主に用いられる 15－16a節

15節は「それは」と言う接続詞で始まっています。感謝なことに、新改訳聖書ではそのように訳されています。ギリシャ語でも最初にこの接続詞があるからです。つまり、この接続詞を付けることによって、この後の文章は「従順に従っていくことの理由や目的」を表わすことを明らかにするからです。つぶやかずに疑わないで従うその理由です。

◎従順に歩むことの目的・理由

1) ふさわしい人へと変えられる

つまり、主がお用いになるのにふさわしい人、神が喜んであなたを用いようとする、そういう人になあなたが変えられて行くためです。どのような人がふさわしいのか、主がお用いになる人を三つの形容詞が表わしています。「非難される」「純真な」「傷のない」という三つの形容詞が、どういう人が神の前に受け入れられ、喜ばれ、用いられるのか？を表わしています。

(1) **非難されるところのない者となる**： この「非難されるところのない」ということばは新約聖書に5回出てくることばで、「非難する余地がない、欠点のない」という意味を持ったことばです。もちろん、これは、その人のうちに何の罪も見当たらない、見出せないということではありません。この人は神の前に罪を犯した時に、それを神の前に告白して悔い改めて正しく歩み続けている人です。だから、その人を見た時に、非難するところがないのです。問題は、その人が罪を犯していて、周りの人はそのことを知っているのに、いつまで経ってもその人が罪を悔い改めないことです。「この人は分かっていない。こんな酷いことをしていながらこの人は自分が何をしているかが分かっていない。」と、そのような人ではないと言うのです。この人は自分の間違っていることをいつも神の前に悔い改めながら歩んでいます。それゆえに、非難されるところがないと言うのです。

(2) **純真な者となる**： これは「混ぜる」ということの否定形です。ですから、雑り気がない、純粋な、特に、このことばは金属の中に不純物を含んでいないという意味です。聖書の中には、金や銀が精錬されてその中の不純物が除かれていく、そのように清められていくと書かれています。ここで言うことはまさにそういうことです。また、このことばにはぶどう酒の中に水が混ざっていないという意味もあります。この人のうちからは不純物、つまり、罪をいつも除いているのです。先程も見たように、悲しい現実、罪を犯さない人にはならないということです。でも、私たちはその罪をできるだけ除いていこうとして、罪をいつも神の前に告白しながら歩んでいるのです。純真な者、不純物を含んでいない、罪を持ったままにしない、罪を除きながら歩んでいる人です。

(3) **傷のない神の子どもとなる**： 「傷のない」というには「いけにえ」によく用いられることばです。神の前にいけにえをささげる時にその動物は傷のないものでなければいけなかった。ヘブル9：

14に「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」と、また、Ⅰペテロ1:19にも「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」とある通りです。

ですから、私たちも、責められるところ、非難されるところがあつてはならない、そのような神の子どもへと変えられ続けていく、神の子どもにふさわしい者へと変えられていくということです。ですから、この三つの形容詞を使ってパウロが言いたかったことは、神によって用いられる人、神が用いるのにふさわしい人というのは「聖い人」だということです。「聖い人」こそ神によって用いられるのです。繰り返しますが、罪を犯さない人はどこにもいません。罪を正しく神の前に告白して、悔い改めて歩み続けている人のことです。

*「聖い者」になることが、主に用いられる条件

パウロはⅡテモテ2:20, 21でこのように教えています。「20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。」と。家の中にはいろんな容器があつて、それぞれに用途があるのです。ある物は大切なことに使うが、ある物はゴミを集めたりするのに使われるということです。「21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。」、19節に「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」と記されています。罪のことです。「罪から離れる」ということです。自分自身を聖めて罪から離れるなら、その人は尊いことに用いられる器になるということです。「すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」。その後情欲のことが書かれています。ですから、この箇所文脈を見ると、パウロが教えたことは、神に用いていただく人となるために必要なことは、その人が神の前に聖くあること、すなわち、「聖い者」になることが主に用いられる条件だということです。そのことをピリピ書2章でも教えるのです。

今日のテキストに戻って、なぜ、私たちが聖さにおいて変えられていき、益々成長していくことが必要なのか？それは私たちがこの世にあつて大切な務めを頂いているからです。15節に「曲がった邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり、」とあります。パウロは、この世の中にあつて、救いに与ったあなたには大切な務めが与えられていると言っているのです。パウロは今から約二千年前のこの当時の世界をこのような表現をもって表わしています。

*この世は「曲がった邪悪な世代」である

「曲がった」：これは「悪しき、間違っている、不正な、不義の」という意味です。新約聖書の中に4回出て来ます。使徒の働き2:40に「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。」とあります。「曲がった時代」、正しい道から逸れていると言っているのです。神が望んでいる生き方から外れてしまっているということです。

「邪悪」：もう一つは「邪悪な」ということばです。この動詞は「腐敗した、墮落させる、正しい道から脇道へ入らせる」という意味です。新約聖書に7回出て来ます。

ですから、パウロが言わんとしていたその当時の世界がよく分かります。今から約二千年前の世界は今の私たちのこの世界と変わりません。人々は神に従うことよりも自分の思うままに生きていこうとしているのです。生きていきたいとしているのです。神を喜ばせることよりも、自分を満足させること、喜ばせることしか考えていないのです。そうして神に逆らい続けているのです。人々は悲しいことに、神を喜ばせよう、神の前に正しく生きていこうなどとは思わないのです。そのために神に造られているのに…。却って、私たちはどのようにしてもっと自分を喜ばせることができるのか、どうすれば自分の欲を満たすことができるのかと、そのことしか考えていないのです。パウロの時代もそうだった、そして、今の時代もそうです。もしかすると、今の時代のほうがもっと悪いかもしれません。

パウロは言います。どの時代であっても本質的な部分ではみな同じだと。人間は創造主なる神を必要としていないし、創造主なる神を憎んでいるのです。私たちは自分の好きなように生きていきたいとしているのです。そして、そのような歩みを自ら選択して歩み、神の前に罪を積み上げていると言います。

*この世においてキリスト者には務めが与えられている ⇒ 証人としての務め

このような世界だから、このような社会だから、私たち救われた者には大きな務めが与えられているのです。その務めとは「証し人」としての務めです。証人です。このすばらしい神のことを証するのです。このすばらしい救いを証する者です。確かに、今私たちが見て来たように、あなたの信仰が従順な歩みを通して成長することによって、あなたはすばらしい証を為していきます。

注目：15節に「それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、」と、「なり」ということばがあります。「また、曲がった邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり、」と続きます。

これは動詞ですが、実はこの動詞はこの箇所には1回しか出て来ないのですが、日本語ではこのように2回使われています。この動詞は英語の聖書では「あなた自身が証明する」と訳されています。日本語では「なり」と書かれています。確かに「なる、生まれる、創造される」という意味を持ったことばです。なぜ、このようなことばを使ったのか？この箇所でパウロが言わんとしたことが見事に表現されているのです。私たちクリスチャンの証、私たちが人々に伝えることは、「もうすでに私たちの心の中で神が為してくださったこと」です。

例えば、感謝なことに、神は私たちの罪を赦してくださった。罪が赦されたことを私たちは形をもって現わしていくのです。これまで何度も見て来たように、罪赦された者たちは、神からすばらしい約束を頂きました。いつも喜んでいことができる、そういう歩みが出来る者へと生まれ変わったのです。ですから、神の喜びを頂いた者として、私たちはそのように生きていこうとします。永遠のいのちが与えられた。天に住まいを持つと約束された者として今日を生きることができます。では、どのようにしてそれを現わしていくのか？です。私たちは今の世の中のいろんな物を見ていますが、その先を見て生きる者です。いろんなことが言われています。税金がどうなっていくのか？とか…。確かに、これから先の世の中を考えると不安を覚えることがたくさんあります。

でも、信仰者はこれから先を見て、神がどんなことを約束されているのか？に思いを馳せます。すばらしい永遠が約束されているし、しかも、その永遠を約束してくださった全能なる神がいつもともにいてくださるのです。そのことを神から約束された者として、それを頂いた者として、私たちはそのことを形をもって現わしていくのです。それが今日、神が私たちに望んでおられることです。私たちは経験したことがないことを人々に語りなさいと言われていたわけではありません。私たち自身が頂いたこと、私たち自身が経験したことを、ことばだけでなく自身の歩みをもって明かにしていくのです。ですから、先ほどの「なる」ということばが英語で「あなた自身が証明する」と訳されたのは、私はこの地上にあって罪の赦しをいただいたことが事実なのだとすることを私たち自身が証明していくのです。生きた真の神がおられることを私たち自身が証明していくのです。人は死んだ後、神のさばきがあるということ、私たち自身が証明していくのです。

そのような歩みをしていくために必要なものは「神の助け」です。そして、私たち自身が神のその命令に神の助けを頂きながら生きていくことが必要なのです。そのことをパウロはここで私たちに教えようとしているのです。私たちの人生が変えられていることをもって、私たちを変えてくださる生きた真の神がおられることを明らかにしていくのです。それが私たち信仰者に与えられた大きな責任だと言うのです。それにはどうすればいいのかをパウロは教えてくれています。

2) 主に用いていただける

15節の後を見てください。神はあなたを用いてくださるとあります。16a節「いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。」。この「光」ということばは、輝く星、輝く太陽など光を放つものです。そういう意味をもったことばがここで使われています。私たちはこの暗やみの世界の中にあって、光である神を人々の前に明らかにしていこうとします。暗やみの中で星が輝いているように、この罪の世界の中にあって、神のすばらしい光を輝かせるということです。ここで訳者が「世の光」と訳したのは、恐らく、マタイ5：14で「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。」とイエスが言われたからでしょう。確かにそのように訳せますが、実は、ピリピ2：16では「世の光」というよりも「世の中にある光」のことです。私たちがどういう身分なのか、どういう存在なのかということを言っているのではありません。ここで言っているのは「私たちの働き」のことです。ですから、ここでは異なった前置詞を使っているのです。「私たちは世界の光です」と言っているのではなく、「世の中における、その中にいる光です」と言っているのです。

* 「世界の光」の役割は？

(1) 真の神を証する

パウロが16節で言いたかったことは、15節から続いています。世の中は邪悪であり、そして、神の前に逆らい続けている、でも、その中にあって救いに与ったあなたはそこで光として輝く存在なのということです。神はその暗やみの中にあなたを置いてくださり、そして、あなたが光を放つことによってその光がどんなにすばらしいものなのか、それを明らかにしていくのです。マタイ5：16に「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」とある通りです。

ですから、私たちは地上において、自分がどのような者であるのか？そんなことはどうでも良いのです。私たちが示すべきお方は、私を愛して私を罪から救ってください、私を赦してください、永遠のいのちを与えてくださり、私を支えてくださり導いてくださる、そのようなすばらしい神を、この光を明

らかにするのです。それがあなたや私救われた者たちに与えられた大きな責任なのです。私たちは真の神を証します。どのような神がいらっしゃるのかということによって…。私たちがしっかりと輝くことによって、私たちの生き方が変えられ、神によって救われたことを私たちが行ないによって示すことによって光を輝かせ続けていくのです。

(2) 福音を証する

また、「いのちのことばをしっかりと握って、」とあります。この「いのちのことば」とは、救いのメッセージ、福音のことです。そのすばらしさを世に明らかにしていきなさい。そのすばらしさを輝かせていきなさいと言っているのです。もちろん、私たちはことばで語らなければ人々に分からないゆえに、ことばをもってこのキリストのすばらしい救いのメッセージを語ります。同時に、私たちは自らの生き方をもってこの神のすばらしさを世に証していくのです。そのことをパウロはここで教えるのです。

ですから、信仰者の皆さん、あなたは救いに与って、そして、このようなすばらしい目的のために神はあなたを生かしてくださっている。この罪の世界の中にあなたを置いてくれているのです。あなたが輝き続けていくために、あなたがこのすばらしい神を証するために、だから、私たちは信仰において成長していくことが必要なのです。もっともっと私たちが神に喜ばれる者へと変えられていくことが必要なのです。

2. 主に祝福される 16a 節

最後に、16節の後半を見ると、神から与えられる祝福について書かれています。「そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」と。あなたが神のみことばに従い続けていくこと、従順に従っていくこと、それが決して無駄でなかったことに気付く時が必ずやって来るとパウロは約束しているのです。あなたが主イエス・キリストの前に立った時に、神ご自身があなたに祝福を与えてくださるのです。

1) 自分の努力したことが無駄でなかったこと

2) 苦勞したことも無駄でなかったこと

神は何と言われるでしょう? 「いろんな働きをよくやって来た。奉仕をたくさん積んで来た。毎週欠かさずに礼拝に来ている。…」と、そんなことを誉めてくださるのでしょうか? みことばを見る限り、神が誉めてくださるのは、神に対して忠実であったかどうかです。「良くやった、良い忠実なしもべよ」と。神の関心は、私たちが何をするかではありません。私たちが神に対して忠実であり続けているかどうかです。ですから、パウロは言うのです。「従順でありなさい! 神の前に忠実であり続けていきなさい!」と、そういう人を神は用いてくださるし、そういう人を使って神の証をしてくださるし、そして、そういう人を神は祝してくださると、そのような約束を神は与えてくださっています。彼らには主からの報いがあります。マタイ 25:21, 23 「21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」 「23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

結論

信仰者の皆さん、神の命令を聞いた時に「それは無理です。それは出来ません。」という不信仰、それをきっぱりと捨て去ることです。もし、あなたの心の中にそのような思いが湧いてきたなら、次のことをしっかりと覚えておかなければいけません。「無理です、できません」というのは私のプライドが問題だということです。何でも自分でできていることが問題なのです。私たちが神に従っていこうとするなら、間違いなく、100%神の助けが必要です。ですから、この「従う、服従」ということは、あることを私たちに教えてくれるのです。従順に従っていくその歩みは、その人が主なる神のことをよく知っていること、そして同時に、自分自身のことをよく知っていることを私たちに明らかにしてくれます。どういう意味か? 説明します。

自分のことを正しく知っている人たちは、神の命令を聞いた時に、自分の力でできないことにすぐ気付きます。だから「自分の力で頑張ります。」とは言わないのです。その人は神の助けが必要だということを知っています。そして、神の助けによってできることも知っています。そこで「神さま、助けてください」と神に助けを求めながら従っていこうとするのです。神の命令を見た時に「できません!」ではない、「これは神にあってできることです。神さま、私は余りにも弱すぎますから、どうぞ、私を助けてください。そして、あなたが望んでおられるような歩みができるように私を助け続けてください。」と、このように応答します。自分の弱さを知っているからです。

また、従順に歩む人たちは自分のことを知っているだけでなく神のことを知っています。そこで、神は約束されたことは必ず守られることを知っているゆえに、神が「こうしなさい」と言われた時に「神

さま、分かりました。そうします。あなたが備えてくださった助けがあることを知っています。あなたの助けによってできることも知っています。だから、私を助けてください。」と、この人は神の助けを信じて従い続けていこうとします。自分の弱さを知っている人は神の助けを頂きながら従おうとするし、神の力を知っている人はその力を信じて従っていこうとするのです。でも、「私にはできません。無理です。」と言う人は、私たち日本人から見ると謙虚ですばらしいように思いますが、信仰者としては不信仰です。そんな人に神はあなたを造ったのでもないし、そんなことを望んでもいません。神が望んでいるのは、信仰者であるあなたが、弱く罪深いあなたが、どうしようもない私たちが、この神の力によって生きることなのです。それを私たちが実践した時に、その力である神を私たちは誉め称えるし、その時に神のわざが為され、人々があなたのうちにおられる真の神を見るのです。私たちはそのようにして生きるのです。だから、「従うこと」は、神のこと、また、自分自身のことを正しく理解しているかどうかを測る尺度であると言えます。

最後に、13節のみことばを見てください。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」と、二つの動詞に注目してください。

(1) あなたがたのうちに働いて

(2) 事を行なわせてくださる

どちらの動詞もこのギリシャ語からある英語のことばが出て来ています。それは「エネルギー」ということばです。そうすると、パウロは「エネルギーがあなたのうちにある」と最初に教え、そして、「そのエネルギーがあなたのうちでも働きを為している」と教えるのです。ですから、パウロはこの13節で、神のエネルギー、神の力があなたのうちに与えられ、そのエネルギーはあなたのうちでも働き始めていると言うのです。それが私たちクリスチャンなのです。

しかも、感謝なことに、新改訳聖書でも13節の初めに「神」ということばが出て来ます。原語でもそうなのです。なぜ、「神」を初めに持って来たのか？「神」を強調しているのです。「あなたのうちにあるそのエネルギーは神のエネルギーです。あなたのうちにある力は神の力であり、あなたのうちで働いているエネルギーは神のエネルギーであり、あなたのうちに働いている力は神の力だ。何を恐れているのですか？」と言います。この方を信頼することです。この方があなたを使うと言ってくださった以上、使っていただくことです、信仰者の皆さん。

私たちは自分の名誉のために用いられようと言っているのではありません。偉大な神の栄光のために用いられようと言っているのです。そのような歩みを今日から再び歩んでいこうと思いませんか？これがあなたに対する神の約束です。そして、あなたが主に従順に従っていくその歩みは決して無駄ではないのです。確実に、あなたが神の前に立つ時に、神はあなたに言うてくださるのです。「良くやった。良い忠実なしもべだ。」と。今なのです！皆さん、この方に従い続けることができるのは。

そのように歩み続けてください。もし、そうでなければ今日がその決心の日になるように。「できない、不可能だ」という信仰者から、「神の力にあってできる」という、そのような主が望んでおられる信仰者に今日変えられることを心から願っています。

《考えましょう》

1. 主の命令に対して、「つぶやく」ことや「疑う」ことがどうして間違っているのでしょうか？
2. 主の命令に従うことは、可能だと聖書は教えます。その理由を説明してください。
3. 今の世において、私たち「世界の光」に託された務めをしっかりと果たすために必要なことは何だと聖書は教えていましたか？
4. 行ないをもって証をすることがどうして大切なのでしょうか？ また、行ないをもって証をするためにはどうすれば良いのかを記してください。